

受験番号		氏 名		クラス		出席番号	
------	--	-----	--	-----	--	------	--

試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2012年度 全統マーク高2模試問題

国 語 (200点 80分)

2013年2月実施

注 意 事 項

- 1 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。必要事項欄及びマーク欄に正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。

① 受験番号欄

受験票が発行されている場合のみ、必ず受験番号(数字及び英字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。

② 氏名欄、高校名欄、クラス・出席番号欄

氏名・フリガナ、高校名・フリガナ及びクラス・出席番号を記入しなさい。

- 2 この問題冊子は、40ページあります。なお、問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。

なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。

- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

問題を解く際には、「問題」冊子にも必ず自分の解答を記録し、試験終了後に配付される「学習の手引き」にそって自己採点し、再確認しなさい。

河合塾

国

語

(
解答
番号
)

1

}

35

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

人間の中には日々の生活やそこでの自分の人生に十全の満足感を持っている人もいるであろうが、多くの人間たちは少なくとも人生のある時期に挫折を味わい、現実の非合理性に違和感を持ったことがある。実際、自ら新たな行動をしないにしても、現状を「超える」境地を精神的に味わいたいという人々の関心は昔も今も変わることがない。

また、革命ではないまでも、さまざまな改革を唱える言説は山のようにル^(ア)フしている。今の日本もそうであるが、20世紀の作った社会や経済の仕組みが大きく変わり始め、人間の新しい働き方や生き方が模索されなければならない時代にあつては、今までの固定観念に対して「疑う」「超える」ことを念頭に人間は生きているようなものである。かつてのように経済が順調に成長しない一方で、少子高齢化が急速に進み、日本の人々は「学ぶ」ことに焦りを感じるほどの状態にあるのではないか。その意味では日本は「学び」の時代にある。

ここから明らかなように、^A個々人の「学ぶ」という行為には人間と社会や現実との関わりという問題が伏在している。ここではとりあえず、二つの側面から問題を整理しておこう。

第一は、「学び」の対象となる情報や知識の非中立性の問題である。人間が情報や知識といったものに従って生活している以上、これら是否応なしに社会や現実を「作り上げている」側面がある。ところでその社会や現実であるが、そこでは広い意味での権力・利害関係——管理・指揮命令関係から「説得」を含む社会的な統合——が網の目のように張り巡らされている。^Bこの権力関係と情報・知識との関係は一筋縄ではない関係にある。

社会的機能からすれば、本来絶対的に「中立的」な情報や知識はそう多くあるわけではない。自然科学に関わる知識は「中立度」が高いため、こうした権力関係との共存の余地は大きいかもしれないが、そのかわり「利用される」恐れがある。他方、社会に関する情報や知識はゴシップを含め、少なからず権力関係やその中の当事者のポジションに影響を及ぼす可能性がある。単純化して言えば、両者は相互補強的な場合もあるが、厳しい緊張をはらむこともある。ある種の情報や知識の広範な流通が既存

の権力関係に重大な影響を及ぼし、権力の担い手にとってマイナスを招来するような場合、政治権力の担い手はそうした「危険な」情報・知識の流通を制限し、あるいは隠蔽^{いんぺい}することに多大な権力を使うことになる。それが極端に進むようになると、権力の担い手にとって好都合な情報や知識しか供給・流通しなくなり、両者の相互補強関係ばかりが膨張し、結果的に現実そのものの隠蔽が限りなく進行することにもつながる。これは^(イ)テンケイ的には戦争中のプロパガンダや独裁的・自閉的体制について語られてきたストーリーである。そういうところでは特に政治学は死に直面することになる。同時に、現代においてはウェブサイトやソーシャル・ネットワークが政治的変動の大きな媒体になっており、それに神経を尖^{とが}らせる政権は珍しくない。

情報や知識が社会的な現実を「作り上げる」重要な要素であり、そして、この現実を「どのように作り上げるか」によってさまざまな人々や集団の位置取りが違ってくることを考えると、情報や知識とそこに潜む社会的利益志向とのコウ^(ウ)サクに目配りをする必要がある。リーマン・ショックは絶対的な信頼性があるとされてきた格付けなどについての知識や情報が一転して不信

任の対象になった代表例であるが、そこには投資銀行という高収益追求型組織の権力・利害志向が伏在していたことは明らかである。その意味では情報や知識の世界は想像されるほど中立的・ニュートラルな世界ではなく、さまざまな意図が、現在では^(注3)グローバルにせめぎ合うアリーナ^(注4)としての性格を持っている。権力というものは暴力的な形で行使されることがなくなったわけではないが、今日、それは情報や知識などを通して日常的に作動している。当然そのことは、「学ぶ」こと自身がナイーブ^(注5)であってはならないこと、「学ぶ」こと自身が一種の知的なチャレンジの意味を持つことを意味している。多様な「読み解き方」を「学ぶ」ことによつて開放的な思考態度を維持することなど、「学ぶ」側に求められるものも決して少なくない。

第二は情報・知識と社会・現実の関係の歴史的な変化の側面である。この点で^(エ)イゼンとして象徴的な意味を持つのは『学問のすゝめ』の基本的な構想である。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし」と述べつつ、学問の有無が人生の行方を決定する大きな要因であること、「実なき学問はまず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学」の決定的重要性を説いたことはよく知られている。ここでは普通の日常生活にとつて学問が大きな役割を持つ時代が到来しつつあること、これこそが文明状態の決定的な特徴であることが的確に指摘されている。その源を辿^{たど}つ

ていけば、産業革命という巨大な経済・社会変革、アメリカ独立革命やフランス革命という政治革新に行き着くことになる。

これを情報や知識のあり方にそくして言えば、かつての情報や知識は主として現状の再生産や自然の観照のために存在していたことを裏書している。実際、長い間にわたってヨーロッパの学問観の骨格を形成してきたアリストテレス(注6)において、自然学と

いうのは「変えられない」対象をもつばら観照することを目的にしていたのである。これに対して政治学は早くから「より良い生」を実現するための実践学の一つとして現実を変える知的な活動とされてきた。実際、政治体制の変革は一定のスピードで行われてきた。しかし、**C** 貧困といったものがさながら「自然現象」のように思われていたのも事実であった。

情報や知識が一部の例外を除いて広い意味での現実の再生産やその受身の解釈から、現実を「作り変える」基盤へと変化したというのが、過去2世紀のもたらした大きな変化であった。それまで既存の権力関係の従属変数でしかなかった情報や知識がいれば独立変数となり、現実を「作り変える」ようになるということは、まさしく革命的な事態であった。そこでもたらされた一連の発見・発明と技術革命によって古い社会経済関係は急速に解体し、この変化のスピードは基本的に衰えることがなかった。フランス革命は哲学に基づく史上最初の革命とされたが、その後も唯物論という「観念」を基にした革命が世界で相次いだ。『学問のすゝめ』は産業化・文明化の地平が限りなく広がりつつある時代の雰囲気を与えているが、同時に、当時の情報と知識には西欧列強による帝国主義的侵略という権力的な側面が露骨につきまとっていた。人間が現実じゆんかんに諦観ていかんをもって従属している時代から、情報や知識を武器に人間が現実を「作り変える」ようになったことはその権力欲の無限の解放という副産物を伴っていた。

情報と知識のこの解放に対する評価は時代の変化とともに両義的なものになっていった。それが人間の幸福と便益に用いられる保証はなく、大量の破壊力を持つ兵器体系の開発とその政治的動員はかつてなかったような恐怖を巻き起こした。それはいわば人間的な現実がブーメランのように人間自身にハン(オ)エイし、襲いかかる状況に他ならなかった。それとともに、かつて牢固として存在していた現実、「作り変え」の対象とされた現実が人間に対して段々と手応え感を失っていった。岩盤のように固い現実を姿を消し、多かれ少なかれ、人間によって不断に「作り変えられる」世界によって人間は取り囲まれることになった。

人間は伝統的世界の持っていたあの安定性にむしろ憧れ、人為的にそうしたものを「作る」ことを渴望する事態も起こった。もちろん、それはあくまでも「作られるもの」であつたわけであるが。「作り変え」は既存の権力関係の組み換えであり、破壊である以上、不断の権力行使を必要とする。そして、「思うように現実を作れる」ということには、人間自身の「作り変え」（20世紀前半風に言えば「洗脳」、もっと率直に言えば、必要に応じてその大量抹殺さえあえて厭われないということが含まれざるを得ない。それにはかつてなかったようなタイプの権力の誕生と「現実に対する軽蔑」が広範に見られることになる。いわゆる全体主義体制という20世紀の独自の政治体制にはこうした要素が露骨に見られた。権力が自らを制限する現実をそれ自身が「作り変える」ことができるようになれば、残るのは**D** 自己運動する権力でしかない。人間そのものの「作り変え」の問題はその後形態を変えて存続している、現代でもお馴染みのテーマである。

（佐々木毅『学ぶとはどういうことか』による）

（注） 1 プロパガンダ——主義・主張などを宣伝すること。

2 リーマン・ショック——二〇〇八年にアメリカ合衆国の投資銀行であるリーマン・ブラザーズが経営破綻し、その後、株価が暴落するなど世界的な金融危機が起きたという一連の出来事を指した言葉。

3 グローバル——世界的な。地球規模の。

4 アリーナ——古代ローマの円形競技場。

5 ナイーヴ——素朴なさま。

6 アリストテレス——古代ギリシアの哲学者（紀元前三八四～紀元前三二二）。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

1 ルフ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- テンブの才能を持つ
宣戦フコクする
電車のキップを購入する
免許証をコウフする
多額のフサイを抱える

(イ)

2 テンケイ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 事務所をイテンする
食品テンカ物
テンガな舞を披露する
テンラン会に出品する
生産のキョテンを作る

(ウ)

3 コウサク

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 経費をサクゲンする
ソウサク願いを出す
利益をサクシユする
チョサク権を守る
時代サクゴな考え

(エ)

4 イゼン

- ⑤ ④ ③ ② ①
- イガン退職をする
イシンデンシンで通じる
事件のケイイを説明する
決定をイニンする
ガクイを取得する

(オ)

5 ハンエイ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 大仏殿をゾウエイする
画像をエイシャ機でうつし出す
エイコ盛衰の習いに従う
人工エイセイを打ち上げる
自分の姿をトウエイする

問2 傍線部A「個々人の『学ぶ』という行為」とあるが、それについて筆者はどのように考えているか。その説明として最も

適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 非合理的な現実が横行する現代社会においては、社会や経済にとって有用な情報や知識を精査し、合理的な社会の形成に役立てようとするべきである。
- ② 多方面で改革が求められる現代社会においては、固定観念に縛られず、新しい情報や知識をできるだけ多く手に入れるべきである。
- ③ 変化の激しい現代社会においては、今まで蓄積してきた多くの情報や知識のなかから、生の指針として信頼できる真実を見出すように努めるべきである。
- ④ 大きな変動に直面している現代社会においては、情報や知識をそのまま受け取るのではなく、多様な視点から解釈し柔軟に思考する姿勢を持つべきである。
- ⑤ 新しい生き方が模索される現代社会においては、身近な現実にとらわれることなく、グローバルな情報や知識を積極的に取り入れるべきである。

問3

傍線部B「この権力関係と情報・知識との関係は一筋縄ではない関係にある。」とあるが、「権力関係」と「情報・知識」はどのような関係にあるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7。

① 社会には有形無形のさまざまな権力関係が存在しているが、そもそも中立であるとは言い難い難い情報や知識が社会的な現実を構成する重要な要素である以上、情報や知識は権力を補強したり衰退させたりするうえ、権力に利用されたりもするという関係。

② 社会は基本的に権力関係によって成り立っているが、権力の多くは情報や知識に支えられることで維持されているので、特定の権力が長期間継続している社会では、権力者にとって都合のいい情報や知識ばかりが流通するようになるという関係。

③ 社会には複数の権力関係が網の目のように張り巡らされているが、そうした権力と共存することのできる中立的な情報や知識は限られているので、権力は自己に影響を及ぼす情報や知識を退け、中立的なものだけを利用しようとする傾向にあるという関係。

④ 社会において権力関係は人間の生活に大きな影響を与えるものだが、一方で人間は情報や知識によって社会を新しく作り上げようとしているので、権力にとって危険な情報や知識は、常に厳しい緊張のもとで権力と対峙せざるをえないという関係。

⑤ 社会の内部では多様な権力関係がせめぎあっているが、現代では情報や知識も同様にせめぎあいながら共存しているため、多様な権力を統合しようとする者は、社会にとって有益な情報や知識を選択し操作するようになるという関係。

問4

傍線部C「貧困といったものがさながら『自然現象』のように思われていた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8。

- ① 学問の骨格がようやくでき始めたアリストテレスの時代には、政治学がいまだ社会や人生を良くする実践的な力を持たず、貧困のような現実を前にしても具体的な方策を講じることができなかったということ。
- ② 政治学が実践学として機能するようになった時代には、変えられないものである自然と異なり社会的現実の変革すべきものと考えられたが、貧困という現実を実際に変革することは困難だったということ。
- ③ 情報や知識が現状の再生産や自然の観照のために存在していた時代には、現実を補強する知的な活動である政治学が、貧困という社会的現実を自然現象のように観察し研究していたということ。
- ④ ヨーロッパの学問観の骨格が形成されたアリストテレスの時代には、自然現象と社会現象の区別が明確ではなく、両者ともに変えられないものとしてもつばら観照の対象になっていたということ。
- ⑤ 情報や知識が既存の権力関係を組み換える力を持たなかった時代には、社会の現状は堅固なものであると考えられ、それがたとえ不本意なものであってもその現実を受け入れるしかなかったということ。

問5

傍線部D「自己運動する権力」とあるが、「権力」が「自己運動する」のはどういう場合か。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 現実が確固たる拠り所ではなくなったことで、人々がおのずと安定した権力に憧れ、それを求めてしまうような場合。
- ② 人間の権力欲が無限に解放され、人々がそれぞれ権力を求めて情報や知識を競って手に入れようとするような場合。
- ③ 人間を大量抹殺するような横暴な権力が登場し、人間はそれに恐怖を覚えつつも成す術を持たないような場合。
- ④ 社会や人間のありようが権力によって変更可能なものになり、それらが権力を抑制する力を喪失したような場合。
- ⑤ 現実が人為的に作られるものになり、人々が幸福と便益を求めて既存の権力関係を不断に組み換えようとするような場合。

問6 この文章の論の展開に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

10。

- ① まず、非合理的な問題にみちた日本の社会の現状が、その超克を願う人々に「学ぶ」ことへの渴望を生み出している。分析し、「学ぶ」行為の対象となる情報や知識が、既存の権力関係を支えるばかりか、さらに権力者の欲望をどこまでも昂進^{こうしん}させてしまうことを指摘し、「学ぶ」という行為のはらむ危険性を訴えている。
- ② まず、経済的な停滞や少子高齢化といった社会的問題が、人々の間に「学び」に対する積極的な姿勢を生み出していることを見すえたうえで、「学ぶ」行為の対象となる情報や知識には、そもそも中立性は存在し得ないことを確認し、さらに時代の変化に即して不断に変動するものであるという「学び」の特徴を説明している。
- ③ まず、「学ぶ」という行為には、社会や現実に対する個々人の問題意識が密接に関わっているということを指摘し、「学ぶ」行為の対象である情報や知識について、それらが社会の権力・利害関係と無縁ではないことを確認し、さらに現実との関係における歴史性に注意を促して、「学ぶ」という行為に内在する問題を浮き彫りにしている。
- ④ まず、社会や現実と人間との関わりのなかで「学ぶ」という行為を捉^とえることの必要性を強調したうえで、「学ぶ」行為の対象となる情報や知識を、社会における権力関係や利害関係と関連づけて説明し、さらに『学問のすゝめ』やアリストテレスの考えを参照することで、古典から「学ぶ」ことの大切さを提唱している。
- ⑤ まず、「学ぶ」という行為は、社会的現実のなかで生きる人間の精神的営みとして、人間存在の本質とも言えるものだ。述べたうえで、「学ぶ」行為の対象となる情報や知識の非中立性を確認し、さらにそれらに十分に配慮しなければ、「学ぶ」ことがかえって人間の自由を縛りかねないという結論を導きだしている。

第2問 次の文章は、吉村昭よしむらあきらの小説「真昼の花火」の一節である。「私」は大手化学繊維会社「Fレイヨン社」の寝具課で、化学繊維を使った洋風ふとんの宣伝を担当している。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。(配点 50)

私の仕事の内容も、展示会に客足をひきつける案内宣伝から、直接かれらの財布をはたかせて洋風ふとんを買わせる販売用宣伝に自然と変わって行った。私の手によって作成された宣伝文は、洋風ふとんの流れに先廻りさきまわして、かれらに砂糖の甘さを植えつけておかねばならなかったのだ。

私は、それに様々な誘い文句を用意した。

5 棉花めんかわたの二分の一の軽さ、保温性、綿埃わたぼりが立たない、湿気と呼ばない、丸洗いが出来る、煩わしい打ち直しの必要がない……そしてそれらは、そのまま新聞の広告欄に、テレビの画像に、ラジオの音になって休みなく流れつづけていた。

私は、朝、町を出、夜、町に帰った。

驟雨しゅううの多い夏で、町を包む蓮田はすだの上にも雨脚が煙って、白い葉裏を波頭のように一列にひるがえしながら風が渡った。そして、蓮田から湧いた蚊の群が、町の中におびたらしい蚊柱を立てていた。

10 私の作り上げた宣伝文は、島のように孤立した町の中にも運びこまれてきていた。

或る夜の食卓で、弟の口から不意に洋風ふとんの名がとび出した。私は一瞬ぎくりとした。

「売れているの？」

弟の声には、私にひどく遠慮しているひびきがあった。

「よくは知らないが、評判はいいらしいよ」

15 私は、さりげなく十分落ち着きをもって答えることが出来た。

「これからは、ふともも変わって行くのかね」

弟の眼には、家業に対する不安がはつきりとにじみ出ていた。

「さあ」

私は、口ごもった。不用意なことは決して口には出来ない。私には、父の沈黙が恐ろしく思われた。

20 「くだらないことを考えるな」

突然、父の言葉が私たちの間に楔くさびを入れてきた。焦いら立ったその声は、私を無視して弟にだけ向けられていた。

父は云いった。

今までも色々妙なものが出て来たが、その度に消えてしまった。ふとんは、やはり棉花だ。つまらぬ心配などしないで働いていればいいんだ――

25 弟は、父の昂たかぶった語氣に口をつぐんだ。

A 私は、無言のまま箸はしを動かしつづけた。父も弟も一つの強い絆によって結ばれている。私は、孤立している自分を強く感じた。二階の部屋にもどると、やがて、モーターの響きと共に羽虫の群のような綿埃が窓の外に白々と舞い上がりはじめた。

父には想像もつかない大きなものが動きはじめたことを知らないでいる。それもフレイヨン一社だけではなく、他の化繊会社も一斉に、鎌首をもたげはじめているのだ。

30 家族の一員として、私には、そのことを父たちに積極的に知らせる義務がある。工場をたたみ、洋風ふとんを扱う寝具店でも開くように説得すべきなのだ。

が、私には、父が転業することの決していないことを知っている。父は、その巨大なものの力を骨の髄まで知らされる時がやってきても、頑かたくなに家業にしがみついて離れることはしないだろう。それが察しられるだけに、むしろ私としては、巨大なものの実態を知らせることは残酷な気がして、口を閉ざしていること以外に方法を見出せなかったのだ。

35 課員たちは、むしろ私の家が打ち直し業であることを知っている。

B 「どうだね、君は、自分の仕事と家業とのことについて矛盾を感じていないのかね」

水野が、私の顔をうかがいながら云ったこともある。

私は、一瞬ひるんだが、

「仕事は、仕事ですから……」と、さりげなく答えていた。

40 「それは立派だ。よく割り切れたね」

水野は、ことさら神妙な表情で私の顔をみつめていた。

が、私はその言葉に、水野の残忍な性格を感じていた。矛盾を感じないでいられるはずはないのだ。そして、その言葉の底に流れるものは、私の家業を蔑む意識であるのだろうし、家業に背いて働いている私の出世意識を見抜いた冷笑でもあったのだろう。

45 そうした意識は、課内の者たちに共通したものであったにちがいない。その上、かれらには、宣伝担当というポストを一人占めになっている私に対する嫉妬もあるのだろう。しかも、洋風ふとんの順調な滑り出しが、私の功績による所が多いだけに、反感も一層強まっているように思われた。

家で全く孤立していた私は、こんな風に、課内でもいつか孤立した存在になっていた。

50 宣伝という私の仕事は、実態があるようでいて、事実は全く実態のない奇妙な仕事であった。多額な金とキャッチフレーズが、消費者というつかみ所のない対象に向かって、果てしなく放出されて行く。

大海に宝石を惜しみなく投げこんでいるような無駄な浪費を積みかさねているように思われる一瞬が、私をひどく戦慄させる。そして、それが、主として私の手でなされているものだけに、しばしば私には、云い知れぬ不安な感情が襲ってきていた。

そうした私にとって救いになるものは、ただ一つしかなかった。それは、販売面の数字に、その得態^{えたい}の知れぬ宣伝というものが際立った効果を及ぼしていることを知らされることだけであった。

自然に、私の神経は絶えず販売面の動きに集中されていた。すでに展示会は、予定通り七大都市で催されていたし、K商社を

通じて、約五万枚の洋風ふとんが末端の寝具店にまで行きわたり、一応販売面の動きははじまっていた。

砂糖の塊かたまりはすでに路上にばらまかれているのだ。

60 が、販路に洋風ふとんを流すことに熱中している課員たちの断片的な会話からは、販売状況の実態をつかむことはできなかった。

私は、不安と期待の相半ばした不安定な立場に立たされていた。

やがて、売り出し後、一月近くが経った。

水野は、販売状況の全容をさぐるために、課員を放って情報集めに当たさせた。地方都市へ派遣させられるものもあって、三日後になって、資料が課員たちの手で販売系列別に集められてきた。そして、寝具課の第一回の販売会議が、小会議室で開かれた。
65 た。

しかし、その席で提出された課員たちの報告は、決して私の不安を拭ぬぐい去ってくれるものではなかった。

製品は、デパート関係では東京をはじめ地方都市でも例外なく好調な売れ行きを示していた。が、寝具問屋から卸おろされた町のふとん店では、ただ店内に飾られているだけでほとんど動きを示していなかった。その不振の原因をさぐるために、寝具店係りの課員は、軒並み町の寝具店を廻めぐってみたが、どこの寝具店主も同じ意見を口にしているという。

70 つまり洋風ふとんは、棉花わたのふとんより倍以上も値が高く、その上、新製品に対する不安があつて、その危険を冒してまで買い求める客がほとんどないのだ、という。

「ところが、課長」

寝具店係りの課員が、水野に目を向けた。

75 「よく寝具問屋側にきいてみますと、ふとん屋たちは洋風ふとんを余り売りましたがってはいないらしいんですね」
「なぜ」

水野の眼に、急に陰しい光が凝集した。

「あの宣伝文が気に入らないんです」と、その男は断定するように云った。

「つまりあの文句だと、棉花のふとんを扱っている寝具店は、店の商品にけちをつけられているようで反感をおぼえるんです。殊に打ち直し不要というキャッチフレーズですが、あの文句は余りにもふとん屋の実情を知らなさすぎる、と寝具問屋側から笑われましたよ」

私は、急に血が頭に逆流して、意識が霞んで行くのをおぼえていた。そして、同僚たちの視線が私に集中するのを強く感じていた。

「つまり、打ち直しというのは、ふとん屋にとって貴重な財源なんです。お客が打ち直しを出してくれれば、手数料はとれる。目減りした分量を補うために新しい綿も買ってくれる。仕立て直しをするために夜具地も売れる。そうした算盤勘定から云つても、打ち直し不要と謳っている洋風ふとんは、扱い商品としても妙味に欠けるわけです。ですから寝具店では、洋風ふとんはただの色どりとして店に陳列しているだけで、洋風ふとんに興味を持つ客にも、極力棉花のふとんをすすめる傾向にあるんです」

私の体に、羞恥と狼狽とがいちどきに襲ってきた。私の家に来る客も、打ち直しに附随して新しい綿を補充用に買い求め、ふとんの布地も買って行く。私は、課員の言葉のたしかさを認めざるを得なかった。多額な宣伝費は、家業に背を向けていた私の浅い知識のために無効であつたばかりでなく、むしろ逆に、悪い結果をもたらすために費やされてしまったようだ。

沈黙が、不意に席に落ちた。私は、顔をあげることが出来なかった。

「それで、どうしたらいいんだね」

水野の声が、沈黙を破った。

「それでどうしたらいいというのかね」

水野の声が、またした。

寝具店係りの課員が、いぶかしそうに立ち上がった。

「ですから、余り刺戟^{しげき}的な宣伝文は避けるようにして……」

私は、臆した眼を水野に向けた。

水野は、口もとを歪めて苦笑している。そして、急に煙草を灰皿にすりつけるとこちらに向き直った。

一瞬背筋が凍った。私は観念した。水野の残忍な言葉が、私の全身に浴びせかけられる予感が、私の体をふるわせた。

が、水野の眼は、寝具店係りの男に注がれていた。

「君、勉強が足りんね。買ってくれる対象はいたい誰なんだね。ふとん店じゃないんだ、消費者なんだよ。対象を見あやまつてはいけないね。宣伝は、消費者相手にやっているんだ。消費者さえ味方に引き入れさえしてしまえば、ふとん店は、それに従わざるを得ないじゃないか。それに、棉花わたを攻撃し、打ち直しの不利な点を強調しなければ、洋風ふとんの特徴は、打ち出

105
せやしないじゃないか」

水野の言葉に淀^{よど}みはなかった。

「つまり、君の報告によると、寝具店もわれわれの敵方だということになる」

私は、凍った体が、急に生温くほぐれて行くのをおぼえていた。

「志宮君」

110
不意の声に、私は、水野に顔を向けた。

「宣伝文を至急全面的に直してみてくれ、寝具店をはっきり敵として意識して……。いいね」

D 私は、反射的にうなずいていた。

(注) 打ち直し——古くかたくなった綿を再生してふんわりさせること。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 11、13。

(ア) 鎌首をもたげはじめている

- 11
- | | | | | |
|--------------|-------------|---------------|----------------|---------------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 準備にかかろうとしている | 反撃に出ようとしている | 奇襲をしかけようとしている | だまし討ちに出ようとしている | 攻撃をしかけようとしている |

(イ) 算盤勘定

- 12
- | | | | | |
|---------------|----------------|-----------------|--------------------|----------------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 状況を利己的にとらえること | 物事を損得の面から考えること | 古めかしくて時代遅れであること | 利益を得るためには手段を選ばないこと | うまい方法や手順を考えること |

(ウ) いぶかしそうに

- 13
- | | | | | |
|--------|---------|--------|-------|--------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 気難しそうに | 困惑したように | 驚いたように | 恐ろしげに | 疑わしそうに |

問2

傍線部A「私は、無言のまま箸を動かしつづけた。」とあるが、このときの「私」の説明として最も適当なものを、次の

- ① ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

① 父が自分の忠告をまったく聞こうとしないだけでなく、父と弟が強い絆で結ばれていることを見せつけられ、疎外感を覚えるとともに父に対して反感が芽生えている。

② 時代の大きな変化のなかで、家業を脅かしかねない仕事に携わっているがゆえに、家業を通じて強く結ばれている父と弟との間に立ち入りがたさを感じ、言うべき言葉を失っている。

③ 自分の仕事の内容について父に悟られないためには余計なことは言うべきではないと思うとともに、家業を守るために心労を重ねている父と弟への申し訳なさで胸が一杯となっている。

④ 家業がこのさき危機的状况に至るだろうことを知っているだけに、頑固に家業にしがみついている父にどうしたら転業を説得できるかと思い、上手な説得の方法を考えている。

⑤ 家業を廃業するしかないと感じている弟と違って、家業に誇りを抱いている父には自分の言葉が届くことはないだろうと思い、不用意なことを言うまいと素知らぬふりを装っている。

問3

傍線部B「どうだね、君は、自分の仕事と家業とのことについて矛盾を感じていないのかね」とあるが、このような発言をする「水野」を「私」はどのようにとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 家業を顧みず自分の仕事に励んでいる私を賞賛し、会社の業績を上げようとする、責任感の強い人物。
- ② 時代遅れの家業に未練を残す私の思いを承知しながら、会社の方針に従うことを強要する、冷酷な人物。
- ③ 家業よりも自分の出世欲を優先させる私に違和感を覚え、上司の立場からたしなめようとする、冷静な人物。
- ④ 私の家業を見下し、私の抱える葛藤を察しながら、あえてそれについて問いかける、底意地の悪い人物。
- ⑤ 自分の仕事と家業との板挟みに陥った私の悩みを理解し、的確なアドバイスを与えようとする、思慮深い人物。

問4

傍線部C「私の体に、羞恥と狼狽とがいちどきに襲ってきた。」とあるが、なぜ「私」は「羞恥と狼狽」に襲われたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 自ら作った宣伝文に多額の費用がかかっていることにあらためて思い至り、自分の仕事の重大さに気が重くなるとともに、今後うまくやっていく自信がなくなってきたから。
- ② 業界の事情に詳しいはずの自分が失態を演じたことが明らかになり、普段から自分に嫉妬や不快感を抱いている同僚たちに自分を攻撃する口実を与えてしまったから。
- ③ 家業を裏切り同僚の嫉妬に耐えながらも仕事に打ち込んできたのに、業績不振の原因が自分の宣伝文にあると指摘され、自分の存在意義が失われたように感じたから。
- ④ 売り上げの不振を自分一人の責任であるかのよう吹聴されたうえ、弁明の機会も与えられることなく、この場の冷やかな雰囲気にはたすら耐えるしかなかったから。
- ⑤ 寝具店の内実に通じているはずの私が、その実情をふまえない宣伝文句を考案したことで、会社に多大な不利益を与えかねないことに気づかされたから。

問5

傍線部D「私は、反射的にうなずいていた。」とあるが、このときの「私」の説明として最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 同僚の非難を一身に受けて窮地に陥っていた私を救ってくれたばかりか、私の宣伝文の方針を一貫して支持してくれた上司に感謝し、家業を敵に回す新しい営業戦略にもつい同意してしまっている。

② 上司の表情に浮かんだ残忍さの影に一瞬おびえたが、それが同僚たちに向けられたものであることを知って安堵するとともに、今後の方針を熱く語るその姿に心を打たれ、上司についていこうと思っている。

③ 宣伝の仕事に確かな手ごたえを持てないでいた私は、同僚に非難されてひるんだが、自分の宣伝を支持してくれた上司の言葉に救われたように感じ、その提案が家業に背くものであるにもかかわらず、思わず応じている。

④ 自分が犯した失態に対する上司の批判を覚悟していた私は、その失態に一言もふれずに新たな営業戦略を指示する上司に残忍なものを感じ、自分にとって不利な企てに荷担するほかなくなっている。

⑤ 私を非難するように見せかけて、不勉強な寝具係りの課員をやり込めるといったように、駆け引きが巧みで発想も新鮮な上司に追従することで、ともに会社を発展させていこうとあらためて意気込んでいる。

問6 この文章における表現の特徴の説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

18

・

19

。

- ① 2・3行目の「かれらに砂糖の甘さを植えつけておかねばならなかったのだ」という比喻表現によって、「洋風ふとん」の魅力を伝えるという使命に燃える「私」の自信に満ちた態度が強調されている。
- ② 10行目の「私の作り上げた宣伝文は、島のように孤立した町の中にも運びこまれてきていた」という描写には擬人法が用いられ、時代の趨勢^{すうせう}が辺鄙^{へんぴ}な町にも浸透してくるさまが効果的に表現されている。
- ③ 50行目の「宣伝という私の仕事は、実態があるようにいて、事実は全く実態のない奇妙な仕事であつた」以下は、現在の「私」が過去を回想している部分であり、過去と現在を織り交ぜながら語ることで、物語に重層的な構造がもたらされている。
- ④ 66行目以降の小会議室の場面では、販売状況を報告する課員とそれを追及する水野との緊迫したやりとりのなかで、「私」の心情が揺れ動く様子が細やかに描写されている。
- ⑤ 92行目で「それで、どうしたらいいんだね」、94行目で「それでどうしたらいいのかね」とほとんど同じ台詞を繰り返すことで、思いもよらない事態に陥った水野の狼狽と当惑を巧みに示している。
- ⑥ 社会の急激な変化を背景に、大企業の急速な台頭や新製品の普及といった題材を扱いながら、その渦中で翻弄される人々の姿を鮮やかに描き出している。

第3問

次の文章は、『小夜衣』の一節である。大納言の姫君は、帝（上）の女御となった継母の娘の後見役として宮中に入つたが、帝は姫君の美しさに心を奪われ、思いをほめめかす。その思いは女御方の人々の知るところとなり、姫君は苦悩する。これを讀んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

（注1）かかる住まひのみ、あるまじき事と思しとるにも、「父君のいかやうにか思ひ給はんずらん。我がけしからぬ心づかひとこそ、（注3）北の方も言ひなし給はめ」と、とにかくに（ア）かきくらされて、我ながら我とおおぼえずうとましきに、「世にはもの思は（a）ぬ人もこそあるらめ」など、「たぐひなく心憂かりける身かな」と思ひ知らるるに、涙のみかきくらされて、局がちにのみおはしますに、上は、つれづれ思しわびて、昼つ方、さしのぞき給へ（b）るに、紅梅の二重織物の小桂に、梅の唐衣など、はなやかに着なして、袖もところどころうちしをれて、ながめ臥したり。

X やがてかたはらにゐさせ給ひつるに、いと恐ろしく、立ち退くを、ひきとどめさせ給ひて、「ただ心やすく思せ。御心ゆかざらんに、世の男などのやうに押し立ち、情けなき心づかひは、見え奉るまじきものを。つれなき御心の情けなさを、恨み聞こえんと思ふを」など語らひ給ひて、「はかなく見そめ奉りてよりは、人知れぬ心ばかりは碎き侍れども、つれなき御気色のみまされば、いとつらくも、また身の憂さも思ひ知られ侍る。いみじく気遠き物の姫君も、さやうにつれなくそらおぼめきたるはあらじな。いざ、たぐひなき世語りにも伝へてん」と仰せらるれば、いとかう近々なる御気色を、恐ろしく心苦しめて、「さらずとも、かかる御心を人々もみな見知りて侍れば、世語りにも侍りなん。いと恐ろしく侍るものを」と（Y）うち泣くに、「いとめづらかなもあるかな。何事を、いかにと、人々思ひ咎め侍らん。まろこそ、なほ例にもしつべく、心のどけさは人に似ぬ心地し侍れ」など語らひ給ひつつ、人の声する気色なれば、怖ぢわなくも、（イ）ことわりにいとほしくて、立ち退き給ふに、小さき机に色々の紙などのあるに、梅襲の薄様におし巻きたる文のあるを、取りて御覧すれば、

A あさかりし色と恨みし小夜衣ふかくは誰か染めまसारらん

薫^かりなども、ただ人のとは見えぬに、手などのうつくしきなべてならぬを、奥^{おく}さまにひき開けて御覧^{ごらん}するに、あさましくて、ひき取りぬるも、いとねたし。「いかなる人の御文^c」にか。かかる思ふ人持ち給へれば、つれなきもことわり」など、恨みさせ給ひて、

B あさくこく何に染むらん小夜衣いづれの色といかで知らましと仰せらるる、いとわびし。

C あさきこき色とも知らずうき身には涙に朽^くちし小夜の衣をとばかり言ひまぎらはす気色もなべてならぬに、人の近く参り寄れば、帰らせ給ふにも、「こはをかしき我が心かな」と「いかにも、人の知らば知れ。あながちつつむべき心かは」と思しなりぬ。

(注)

- 1 かかる住まひ——帝に恋慕されながらの宮仕え。
- 2 父君——姫君と女御の父親である大納言。
- 3 北の方——姫君の継母で、女御の実母。
- 4 気遠き物の姫君——物語に登場する、うちとけにくい性格の姫君のこと。
- 5 薄様——薄く漉^すいた鳥の子紙。
- 6 小夜衣——夜着。大形の着物のような形で、寝るときにかける。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

20

22

。

(ア)

かきくらされて

20

- ① むなしくなりなさって
- ② じつと部屋にこもっていて
- ③ 自然と悲しみで心が暗くなって
- ④ どうにも不安にさせられて
- ⑤ ついうろたえてしまつて

(イ)

ことわりにいとほしくて

21

- ① 言いようもなく悔しくて
- ② お詫^わびを言う気にもなれず
- ③ 道理に合わずかわいそうで
- ④ 理由がはつきりとわかつて
- ⑤ もつともなことだと気の毒で

(ウ)

つつむべき心かは

22

- ① 隠さなければならない心か
- ② とがめるような心ではない
- ③ 秘めた心は誰にもわからない
- ④ 覆^{おお}い隠す方がよいのだろうか
- ⑤ どうにも止められない心だよ

問2 波線部 **a** ～ **c** の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は

23

- | | | | | | | |
|---|----------|--------|----------|--------|----------|--------|
| ⑤ | a | 打消の助動詞 | b | 受身の助動詞 | c | 格助詞 |
| ④ | a | 打消の助動詞 | b | 完了の助動詞 | c | 完了の助動詞 |
| ③ | a | 完了の助動詞 | b | 尊敬の助動詞 | c | 格助詞 |
| ② | a | 打消の助動詞 | b | 完了の助動詞 | c | 断定の助動詞 |
| ① | a | 完了の助動詞 | b | 受身の助動詞 | c | 格助詞 |

問3

傍線部X「やがてかたはらにゐさせ給ひつるに」とは、誰がどのようにしたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 涙で袖をぬらしていた姫君が、自分の部屋をのぞいている帝の気配をいち早く察し、何気ない様子で迎え入れた。
- ② 姫君の部屋にやって来た帝が、姫君の袖をそっと引っぱり、ひそかに自室まで連れて行こうとした。
- ③ くつろいで横になっていた姫君が、帝にその姿を見られてしまったことを恥じ、すぐに奥に入ろうとした。
- ④ 姫君の部屋をのぞいた帝が、物思いに沈む涙がちな姫君の様子を見て、中に入るとすぐさまそのそばに座った。
- ⑤ 静かに部屋に入ってきた帝が、逃げようとする姫君の袖をとらえて、姫君を自分のそばに座らせようとした。

問4

傍線部Y「うち泣くに」とあるが、このときの姫君の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の

- ①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

① 帝が、あなたへの愛情に変わりはないけれど人目を避けて会いに来るのがつらいと嘆くので、このままではいつか自分には帝に捨て去られ、周囲の物笑いの種になってしまうのではないかと、恐ろしく心配に思っている。

② 帝が、初めて見たときから恋しく思っているのにあなたは冷たいと姫君の薄情さを恨みつっ、二人の仲を世間の語りぐさにしようとまで言って迫る、その強引な態度も、周囲の噂になることも、恐ろしくつらく思っている。

③ 帝と一緒にいるところを人に見られるのが恐ろしく、この場を早く立ち去りたいと思う反面、帝が自分への深い思いを切々と訴えるので、女御には申し訳ないが、こんなに帝に愛されていることを嬉しくも思っている。

④ 帝が、どんな良家の姫君であっても、帝である自分の求愛をすげなく断るなどということは許されないと言うのが恐ろしく、宮中を去ろうと決意するものの、親がそんな自分をどう考えるかと不安に思っている。

⑤ 帝に、今は変わらぬ愛を誓ってくれていてもいずれは自分に冷淡になってしまうのではないかと訴えたところ、冷たいのは世間の語りぐさになることを恐れ無関心を装うあなたの方だと責められ、恐ろしく悲しく思っている。

問5

AとCの和歌に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① Aは、姫君が詠んだものであり、「小夜衣」の「色」に男女の契りの深さをたとえて、今でもあなたを深く愛していると手紙の相手に告げる内容になっている。
- ② Aは、姫君に手紙を出した相手が詠んだものであり、「あさ」に「浅い」の意の「浅」と「朝」を掛けることで、「朝」から「夜」までずっと姫君を深く思っているという気持ちをこめている。
- ③ Bは、帝が詠んだものであり、「いづれの色」に、姫君に手紙を出した相手の意をこめ、その相手は誰であるのか知りたいものだと願う気持ちを表している。
- ④ Cは、姫君が詠んだものであり、Bの和歌の問いかけに、私に手紙を出した相手は、私の気持ちがわからずにつらい思いをし、涙を流しているだろうと応じている。
- ⑤ BとCは、帝が詠んだものであり、姫君の相手をねたましく思いつつ、また、その存在を知ったことで落胆する心の内をとらえた連作となっている。

問6 この文章の表現の特徴と内容についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

- ① 自らの立場に苦悩する姫君の心理描写から始まり、中盤では帝と姫君との会話や和歌のやりとりが示され、それを契機として最後には「いかにも、人の知らば知れ」などと、帝が姫君への恋心をより募らせていく様子が描かれている。
- ② 「紅梅の二重織物の小桂」「梅襲の薄様」など、華やかな衣装や美しく彩どられた手紙などの描写をさしはさみ、宮中生活ならではの華美な様子を表すことで、かえってその暮らしに嫌気がさしている姫君の憂愁を際立たせている。
- ③ 「言ひなし給はめ」など、姫君の父親や継母、また恋人といった周辺の人々の言動を克明に描くことで、それらの人物が、姫君と帝との恋の行く末に影響を及ぼす重要な登場人物となっていることが示されている。
- ④ 姫君の元にあった手紙によって、姫君には言い寄る男が幾人かいることがわかるが、「恨みさせ給ひて」などの、それに憤慨する帝の様子が描かれることで、いずれ帝は姫君を見捨てることになるという結末が暗示されている。
- ⑤ 「つれづれ思しわびて」「取りて御覧ずれば」などと、地の文では、帝の行為にのみ尊敬語が用いられることで、帝と姫君の身分の違いが示され、帝の意向にあらがえない姫君の弱い立場が浮き彫りになっている。

第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。

(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)

(配点 50)

北村鄭蘇仙、一日夢至冥府、見閻羅王方録囚。有隣村一媼至中

(1)

殿前王改容拱手、賜以杯茗。命冥吏速送生善处。鄭私叩冥吏

曰、「此農家老婦。有何功德。」冥吏曰、「是媼一生無利己損人之心。夫

利己之心、雖賢士大夫或不免。然利己者必損人。種種機械、因是

而生、種種冤愆、因是而造。甚至貽臭万年、流毒四海。皆此一念

為害也。此一村婦、而能自制其私心。讀書講学之儒、对之多愧色。

矣。何怪王之加礼乎。」鄭素有二心計、聞之惕然而寤。

(紀昀『閱微草堂筆記』による)

(注)

- 1 北村鄭蘇仙——北村は地名、鄭蘇仙は人名。
- 2 冥府——冥界（死後の世界）の役所。中国では昔から、冥界にも役所があり、冥吏（冥界の役人）によって死者の処遇が決定されると考えられていた。
- 3 閻羅王——冥界の王。閻魔大王。
- 4 録囚——罪人を取り調べる。
- 5 媼——老婦人。
- 6 拱手——胸の前で両手を合わせて行う礼。
- 7 杯茗——一杯のお茶。
- 8 機械——いつわりたくらむ心。
- 9 冤愆——うらみや仲違い。
- 10 貽臭万年——後世に汚名を残す。
- 11 四海——世の中。
- 12 心計——心の中で計算すること。
- 13 惕然——おそれつつしむ様子。

問1 傍線部(1)「改容」・(2)「素」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は 28・29。

(1)

「改容」

28

- ① 顔をほころばせて
② 腹を立てた様子で
③ 態度を引き締めて
④ びっくりした様子で
⑤ 疑わしげな顔をして

(2)

「素」

29

- ① 絶えず
② 日頃から
③ 生まれつき
④ 当然
⑤ わずかに

問2 傍線部A「命冥吏速送生善処」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

① 命ニ冥吏速送ニ生ニ善処ニ

冥吏に速^{すみや}かに送るを命じ善処に生まる

② 命ニ冥吏速送レ生ニ善処ニ

冥吏に命じて速かに善処に生まるるを送る

③ 命_下冥吏速送生_中善処_上

冥吏に速かに送り善処に生まるるを命ず

④ 命ニ冥吏速送生ニ善処ニ

冥吏に命じて速かに送りて善処に生まれしむ

⑤ 命ニ冥吏速送生ニ善処ニ

冥吏に命じて速かに送らしめ善処に生まる

問3 傍線部B「夫利_レ己_レ之心、雖_ニ賢士大夫或不_レ免_一」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。解答番号は 31。

- ① そもそも自分が得をしようとする心というのは、賢明な知識人でもついつい抱いてしまう場合がある。
- ② そもそも自分が得をしようとする心を持つことは、賢明な知識人なら決して許さないものである。
- ③ そもそも自分を向上させようとする心というのは、賢明な知識人でもなかなか持てないものである。
- ④ そもそも自分を向上させようとする心というのは、賢明な知識人なら当然持っているはずである。
- ⑤ そもそも自分の能力をうまく生かしたいと思う心は、賢明な知識人だけが持っているものである。

問4 傍線部C「読書講学之儒、对_レ之多_ニ愧色_一矣」とはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちか

ら一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 書物を読み学問を研究する儒者であっても、閻魔大王の前では、恐怖のあまり堂々とした態度が取れなくなるだろう。
- ② 書物を読み学問を研究する儒者であっても、閻魔大王と向き合うと、多くの者が過去に犯した過ちを後悔するだろう。
- ③ 書物を読み学問を研究する儒者であっても、この老婦人の前に立つと、多くの者が尊大な態度を取ってしまうだろう。
- ④ 書物を読み学問を研究する儒者であっても、この老婦人の前に出ると、引け目を感じてしまう点が多いだろう。
- ⑤ 書物を読み学問を研究する儒者であっても、自分自身の過去を振り返ってみると、反省することが多いだろう。

問5 傍線部D「何怪^ニ王^一之加^レ礼^乎」について、(i)書き下し文・(ii)その解釈として最も適当なものを、次の各群の①

⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 33 ・ 34。

(i) 書き下し文

33

- ① 何ぞ王に之れ礼を加ふるを怪しむやと
- ② 何ぞ王之^ゆきて礼を加ふるを怪しまんやと
- ③ 何ぞ王之きて礼を加ふるを怪しむやと
- ④ 何ぞ王の礼を加ふるを怪しむかなと
- ⑤ 何ぞ王の礼を加ふるを怪しまんやと

(ii)

解釈

34

- ① どうして大王様が老婦人を丁重にもてなしたことを不思議に思うことがあろうか。
- ② どうして大王様が進み出て老婦人を丁重にもてなしたことを不思議に思うことがあろうか。
- ③ なぜ大王様が進み出て老婦人を丁重にもてなしたことを不思議に思うのだろうか。
- ④ なぜ大王様が老婦人を丁重にもてなしたことを不思議に思うのだろうか。
- ⑤ 大王様が老婦人を丁重にもてなすとはなんと不思議なことであらうか。

問6

本文の内容を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 鄭蘇仙は夢の中で、信仰心を持たない知識人よりも、信仰心の厚かった無学な老婦人のほうが冥界では手厚くもてなされていることを教えられ、信仰心を持つことを決意した。
- ② 鄭蘇仙は夢の中で、私欲を抑えることができた老婦人が冥界においてたぐいまれな人物として高く評価され、良い場所生まれ変わることができるようになったことを知った。
- ③ 鄭蘇仙は夢の中で、冥界の役人から、自分の利益を追求して世の中に害を与えた者はまともな死に方ができないと告げられ、私欲を持たない人間に生まれ変わるべきだと考えた。
- ④ 鄭蘇仙は夢の中で、生前に自分が犯した過ちを悔い改めることができれば閻魔大王によってただちにこの世に生き返らせてもらえることを、冥界の役人から教えられた。
- ⑤ 鄭蘇仙は夢の中で、老婦人が生前に私欲を少しも持たなかったことを閻魔大王から評価され、冥界の役人に抜擢されたのを知り、自分も無欲な生き方を見習おうと思った。

